

インクルーシブ体育実践から読み取る成果と課題
—体育理論と体育実技の連携からルール学習に着目して—

岡田雄樹・山本祐大・山口将司

教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 第8号

令和8年(2026)3月

インクルーシブ体育実践から読み取る成果と課題

—体育理論と体育実技の連携からルール学習に着目して—

岡田雄樹¹・山本祐大²・山口将司²

(1: 京都教育大学) (2: 京都市立京都御池中学校)

Outcomes and Challenges of Inclusive Physical Education Practice: Focusing on Rule Learning through the Integration of Theory of Physical Education and Practical Activities in Physical Education

Yuki OKADA · Yuta YAMAMOTO · Masashi YAMAGUCHI

2025年9月30日受理

抄録: 本研究は、インクルーシブ体育実践から成果と課題を読み取ることを目的とした。特に体育理論と体育実技の連携からルール学習に焦点をあて、その目的に迫った。対象生徒Aさんは、自分が参加をし、運営をしたり、大会に出たりしたことで、「自分にもできることがいっぱいある」と感じたことは大きな成果と言える。課題として、特にインクルーシブ体育には、インクルーシブの視点、つくるスポーツ、ルール学習の視点が教師だけでなく、生徒たちにも求められるため、それらを伝える体育授業論の知見解明が必要となる。

キーワード: インクルーシブ体育、体育理論と体育実技の連携、ルール学習

I. 緒言

近年、「共生社会」の実現に向けて、「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会」を目指している(文部科学省、2015)。そして、インクルーシブ教育の理念に基づき、障害の有無にかかわらず、すべての子どもたちが共に学び合い、互いに支え合いながら成長することが求められている。そこで、「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」の確立が急務とされている。さらに、障害のある者が教育制度一般から排除されないことや自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、そして、個人に必要な合理的配慮の提供が必須とされている(文部科学省、2012)。

これらを踏まえ、体育授業に焦点をあけると、その特性上、身体的な障害や発達の違いを持つ子どもたちにとって、参加のしづらさや不公平感が生じやすい場である。そのことから、すべての子どもが平等に参加し、能力やニーズに応じた指導を受けることができる環境づくりが求められている。このように、インクルーシブ体育の実践が求められる中で、教育現場には、解決すべき課題が多く存在している。例えば、教師が障害のある子どもへの指導方法を理解し、適切に対応するための専門的な知見の不足や、障害の種類に応じた個別支援の体制が十分に整っていないという現状がある。また、体育の授業において使用する施設等が、すべての子どもにとって利用しやすいものになっていない場合も多い。さらに、インクルーシブ体育を実現するためには、教師、児童生徒、保護者など全ての人の意識改革が必要であり、障害を持つ子どもたちに対する偏見や誤解を解消するための教育が求められる。そこで本論文では、インクルーシブ体育の実践現場における現状を詳しく分析し、成果と課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、現場の授業の観察を通じて、インクルーシブ体育の実践内容、指導法、生徒の反応を分析することで、インクルーシブ体育の理論的な枠組みを再考する一助とする。

II. 方法

1. 本実践の対象

本研究は、以下の方法によって進められた。

対象学年：K府K市立X中学校において中学校3年生2クラス合同（男子：27名 女子：27名 計：54名）

実施期間：2023年10月～11月（全12時間）

授業者：保健体育科常勤講師（Y教諭）、教職経験4年目 ※T2：保健体育科教諭、教員歴35年目

授業協力者：体育科教育学を専門とする大学教員が1名、保健体育を専門とする中学校教諭1名が協力を当たった。

2. 単元の設定

大テーマは、「障害の有無にかかわらず共に学ぶ体育授業」として、単元目標は、「共生社会に向けてのスポーツの在り方について学ぶ」と設定した。また、学習内容については、体育実技、体育理論を以下のように設定した。

■学習内容(体育実技)

知識・技能：ラケット操作、相手に応じた打球を打つ、相手の打球に応じたポジショニングを理解できるようにする。

思考・判断・表現：自チームの攻撃パターンを考え、ゲームを通して課題を見つけ改善できるようにする。

学びに向かう力・人間性：大会企画を通じて、一人ひとりの違いに応じたプレイを尊重できるようにする。

■学習内容(体育理論)

知識：文化としてのスポーツの意義について理解できるようにする。

技能：大会運営力を身に付ける。誰もが楽しめるバドミントンをつくることができるようにする（ささえる）。

思考・判断・表現：多様な人々を結びつけるスポーツのルールについて思考し、運営を通して表現できるようにする。

学びに向かう力・人間性：大会企画を通じて、一人ひとりの違いに応じたプレイを尊重できるようにする。

3. 分析方法

本授業が、生徒にどの程度受け入れられたのかを確認するため、形成的授業評価（高橋ら、1994）で分析した。また、何がどの程度理解できたのか、何を考えたのかを可視化するため、生徒らによって記述された学習カードや簡易インタビューにて確認した。さらに、本実践では、「誰もが楽しめるバドミントン」を「つくる」ことが重要な視点となるため、ルールづくりに関する分析も行った（丸山、1997、2015、2019、2025）。

4. 単元計画

本単元では（図1、図2）、体育理論の「文化としてのスポーツの意義」の内容とバドミントン（実技）を組み合わせて行った（図3）。単元前後に、「誰もが楽しめるバドミントンとは」という問いを投げかけ考えさせた。今までの体育分野の学習においても、生徒の実態に応じてアダプテッドしてきたが、それは、教師主導であったため、今回のバドミントンでは、大会を企画し、運営することを目標とし、生徒たちが自分たちで考え、実行していくことを大切にしたい。また、技能としては、ゲームを通してラケット操作やオフザボールの動き、状況判断を意識した戦術を学ばせた。ラケット操作の技能として、単元の中盤までは、毎時のはじめにショットスキルドリルゲームに取り組みさせた。そこでは、高いネットでのラリー、サーブの練習、狙った籠にシャトルを打って入れるなどの様々な場の設定を行い、ショットのスキルを高めた。また、個々で課題や目標を設定し、練習できる時間に没頭できることも意欲的な学習につながると考えた。単元後半の練習では、生徒全員一律の練習ではなく、各班の課題に応じた練習が選択できるようにした。また、バドミントン大会につなげるための下位教材として、エリアポイントゲームを行った。これは、バドミントンコートをも4分割して、シャトルが落ちた場所によって点数が変わるというゲームである。自分たちで自コートエリアポイントを設定して、お互いにゲーム前に申告しあう。この申告する作業が、後の大会でのゲームでのルールをアダプテッドさせていくやりとりにつながることを期待した。また、エリアを意識することが、ゲームの中でねらった場所に打つというラケット操作を高めるこ

とにつながると考えた。つぎに、正規のルールに近い形でのゲームも行った。運動能力が高い生徒にとっては、やりがいのある部分も感じるかもしれないが、果たしてこれが全員にとって、「誰もが楽しめるものかどうか」ということを体感させ、考えさせるようにした。

そのため体育理論では、大会を企画するための知識や共生社会に対する理解を促すことにした。昨年までの体育理論の学習では、「運動やスポーツの多様性」「運動やスポーツの意義や効果と学び方や安全な行い方」について学んできた。そして今回は、「文化としてのスポーツの意義」を学習した。スポーツにはどのような文化的な意義があるのか、またスポーツが果たす文化的な役割にはどのようなものがあるのかを生徒たち自身が考えることを通して学ばせた。今回の単元構成では、体育理論の授業をバドミントン(実技)と関連させ、はじめ、なか、おわりに設定した。また、取り扱う内容も教科書に示されている順番とは変え、1時間目に“現代的なスポーツの文化的意義”、2時間目に“人々を結びつけるスポーツ”、3時間目に“国際的なスポーツ大会の役割”を設定した。これは、今回のバドミントン授業における単元構成に則すように変更した。体育理論をはじめ、今までの様々な領域で得た知識を、バドミントン(実技)で確かめ、修正していくという行為も大切にしたい。

1時間目(体育理論)	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目
○号令	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼
○ねらいの確認 「スポーツの文化的意義について理解しよう」	○ねらいの確認 「バドミントンについて知ろう」	○ねらいの確認 「ラリーゲームをしよう」	○ねらいの確認 「ゲームの動きを身に着けよう」	○ねらいの確認 「色々な打球を使って攻撃をしよう」	○ねらいの確認 「ポジションを意識して動こう」	○ねらいの確認 「自分のチームの攻撃パターンを考えよう」
●誰もが楽しめるバドミントンとは ●インクルーシブ体育について ●様々なスポーツ大会について知る ●自分たちに適した大会を計画するには ●本時のまとめ	●オリエンテーション ・基本用語 ・ルールについて ●バドミントンの動きを取り入れたw-up ●ラケットの振り方・打ち方 ●シャトル慣れ ・1人で上に打つ ・2人でラリー ・3人で ●本時のまとめ	●w-up ・準備運動 ・バド up ●グループ分け ●投げミントン ●ラリーゲーム ・ペアで何回続くか ・グループで何回続くか ●本時のまとめ	●w-up ・準備運動 ・バド up ●試しのゲーム ○ゲームの基本ルール○ ①サーブはショートサービスラインから。サーブミスはレット(やり直し)。サーブは対角に入れる ②ラインアウト・ネットを超えない場合相手に1点 ③同じ人が連続で打たない。ペアと交互に打つ。 ④相手への暴言・煽り・味方への叱責・審判への悪態などがあれば、自チームの得点-1点(ネガティブポイント) ●本時のまとめ II ふりかえり①	●w-up ・準備運動 ・バド up ●種類に応じた打ち方の練習 ●試しのゲーム ●本時のまとめ II ふりかえり①	●w-up ・準備運動 ・バド up ●ポジションについて ●エアアポイントゲーム ●本時のまとめ	●w-up ・準備運動 ・バド up ●自分のチームの攻撃パターンを考える ●試しのゲーム ●本時のまとめ II ふりかえり②

図1 単元計画(前半)

8時間目	9時間目	10時間目(体育理論)	11時間目	12時間目	13時間目	14時間目(体育理論)
○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○集合・点呼	○号令
○ねらいの確認 「ゲーム」	○ねらいの確認 「ゲーム」	○ねらいの確認 「大会を企画しよう」	○ねらいの確認 「バドミントン大会を実施しよう」	○ねらいの確認 「バドミントン大会を実施しよう」	○ねらいの確認 「バドミントン大会を実施しよう」	○ねらいの確認 「国際的なスポーツ大会の文化的役割について理解しよう」
●w-up ・準備運動 ・バド up ●自分のチームの攻撃パターンを改善する ●正規ルールゲーム ・総当たり表を使い、全チームと対戦する ・得点は1点ずつ ・勝ち点を競い、リーグの1位を決める ●本時のまとめ	●w-up ・準備運動 ・バド up ●正規ルールゲーム ・総当たり表を使い、全チームと対戦する ・得点は1点ずつ ・勝ち点を競い、リーグの1位を決める ●本時のまとめ	<人々を結び付けるスポーツ> ●みんなが楽しめるバドミントンの大会を班で考える ●班ごとに発表 ・ロイロノート ●ルールの決定 ●w-up ・準備運動 ・バド up ●本時のまとめ II ふりかえり③	●w-up ・準備運動 ・バド up ●前時に決めたルールでバドミントン大会を実施する ・ペアの決め方、道具の工夫など確認しながら行う ・5試合行い、勝敗を競う ・試合時間4分 ●改善点を出し合う ●本時のまとめ 次時の運営確認	●w-up ・準備運動 ・バド up ●改善したルールでバドミントン大会を実施する ○バドミントン大会の基本ルール○ *今までの基本ルールに加えて ①2回つないで相手コートへの返球構わない ②スマッシュはショートサービスラインより後ろで ③ネットにラケットを当てない ④コート、使用するラケット、シャトルは相手と相談 ⑤下剋上方式 ●改善点を出し合う ●本時のまとめ 次時の運営確認	●w-up ・準備運動 ・バド up ●改善したルールでバドミントン大会を実施する ●本時のまとめ II ふりかえり④	●スポーツの国際大会種類 ●自分たちで運営した大会を振り返る ●単元のまとめ

図2 単元計画(後半)

1時間目(実技前)	2時間目(体育館で)	3時間目(最後に)
○号令	○号令	○号令
【ねらい】スポーツの多様な価値を考える。その価値の中にはささえる価値やつくる価値があることを知る ◎現代社会におけるスポーツの意義について考えよう	【ねらい】多様な人々を結び付けるバドミントンのルールを考えよう	【ねらい】普段の対戦では味わえない大会という競技の方式がもつ意味や価値を考える
【ア 現代社会におけるスポーツの文化的意義】教科書 P.170～171 ※誰もが楽しめるバドミントンとはどのようなものか考えよう ワークシートで問う ①スポーツへの多様な関わり方について復習する ・スポーツの多様な価値を考える →人は何のためにスポーツをするのか？ →「文化は人々の生活を豊かにするために人間が創り出したもの」の再認識 ②「しる」をベースに「する、みる、ささえる、つくる」等があることを学ぶ ③インクルーシブ体育について触れる(ささえる、つくる側の視点に立ってみる) ④様々なスポーツ大会について(パラ、デフ、スペオリ、ゆるすばなど) ⑤自分たちに通じた大会を計画するための視点を検討(バトのルールを説明) 発問:色々な差があるけど、そのままできますか？ ○学習したことを整理し、ノートなどにまとめる	【ウ 人々を結び付けるスポーツ】教科書 P.174～175 ①資料を基に、スポーツによる人々の結び付きについて考え、整理する →一人での楽しみでは味わえないみんなで楽しむことの意味や価値⇒ルールの工夫、道具の工夫によって、(そこにいる人々) みんながともに楽しむことができる(インクルーシブの世界)ことを学ぶ ②資料を基に、スポーツが人々を結び付ける理由や工夫について考え、整理する ③「活用する」の設問について考え、発表し合う ・誰もが楽しめるスポーツ大会の企画をし、提案しよう ・タブレット端末を活用して、プレゼンテーションを行う ④学習したことを整理し、ノートなどにまとめる ⑤まとめたことを班、そしてクラスに伝えルールづくりを行う	【イ 国際的なスポーツ大会の役割】教科書 P.172～173 ①知っているスポーツの国際大会を発表し合う ②今回自分たちが行って来た大会について振り返る ○口絵1などの資料を基に、オリンピック・パラリンピックなどの国際大会の教育的意義と倫理的価値を考え、整理する ○資料を基に、国際的なスポーツ大会が国際親善や世界平和に果たす役割について考え、整理する ○資料を基に、メディアの発達の影響について考え、整理する ○「活用する」の設問について考え、発表し合う 「あなたが知っている国際的なスポーツ大会が、国際社会に与えている影響について、グループで話し合ってみましょう」 →親善や平和につながることのイメージづくり ○学習したことを整理し、ノートなどにまとめる ※誰もが楽しめるバドミントンとはどのようなものか考えよう ワークシートで問う

図3 単元計画(体育理論)

5. 指導や支援の工夫

(1) 球技ネット型「バドミントン」と体育理論「文化としてのスポーツの意義」のユニット単元構想

体育理論の学習をバドミントン単元のはじめ、なか、おわりに設定し、スポーツの文化的意義を学ぶことで、スポーツを「する」だけの関わり方にとらわれない、「誰もがスポーツの意義を感じ取ることができる」ということを、生徒たちの共通の土台としてもてるようにした(図3、図4)。また、得た知識を実際に実技で試すことができるように学習機会を設定した。くわえて、単元を貫く問いを「誰もが楽しむことができるバドミントンとは？」に設定し、「誰もが」を考えることが、対象生徒だけにとどまらず、自分だけでなく周りの人も含めて考えることができると考えた。

(2) 用具・ルールの工夫(図5)

「誰もが楽しむことができるバドミントン」を考えたり、実施したりするためには、用具やルールの工夫は欠かせないため以下のような工夫を行った。

①視覚化…ホームポジションを認識するために、コート内にフラットマーカーを設置した。ハイクリアーなど高いショットを習得するために、高いネットを設定するなどして工夫した。

②選択制…ラケットはシャフトの長短、ストリングドエリアの広さが違うものを選択できるようにした。シャトルも、白色だけではなく、蛍光黄色、青色といった色違いや、形

1. オリンピック・パラリンピックについて調べたことをまとめよう

パラリンピックの歴史
起源は1948年で医師レドウィッチ・グッドマン博士の提唱によって、ロンドン郊外のストーク・マンデル病院内で開かれたアーチェリーの競技会

「スポーツを通じて平和な世界の実現に寄与する」ことをオリンピックの目的
パラリンピックは大会を通じ共生社会の実現を促進することを目指している。

青、黄、黒、緑、赤の輪は、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ、オセアニアの5つの大陸を意味している。また、青、黄、黒、緑、赤の5色に加えて、旗の地の色である白の6つで世界の国旗のほとんどの色を指ける。これらのことから、「世界は一つ」という意味が込められている。

スポーツを通して障害や性別、文化や国籍、人種などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献する。

2. 体育理論のまとめ

・(インクルーシブ)とは
「すべてを包括する、包みこむ」こと。障がいの有無や性別、性的志向、人種などの違いを認め合い、すべての人がお互いの人権と尊厳を大事にして生きていける社会をインクルーシブ社会と云う。

・(ダイバーシティ)とは
人種・性別・嗜好・価値観・信仰などの違いを受け入れ、多様な人材が持つ可能性を発揮させようとする考え方

・(ユニバーサルデザイン)とは
年齢や障がいの有無などにかかわらず、最初からできるだけ多くの人が利用可能であるようにデザインすること

図4 体育理論資料抜粋

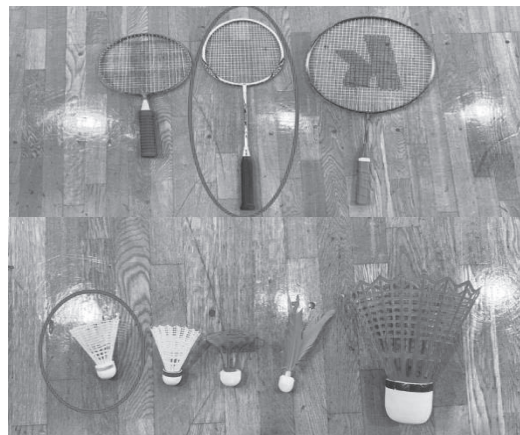


図5 教具(自分に合ったものを選択)

状や大きさ、跳ね具合が異なるものを用意し、生徒が自由に選択できるようにした。

③ルール…コートの広さ、試合人数、2回で相手コートに返してもOKなど、クラス全体で話し合って統一する経験や、場面状況に応じてペアや対戦相手とルールをアップデートしていく経験を積むようにした。

(3) 単元の中での教材の配列

獲得したい知識や技能のために、積極的に下位教材を活用した。「投げミントン」では、どこをねらうのかということ、「ショットスキルドリルゲーム」では、複数あるショットを意図して使い分けること、「エリアポイントゲーム」では、どのエリアを守り、またどのエリアをねらうとよいのかということを目指して取り組んだ。また、ある程度の知識や技能を獲得した単元中盤に、正規ルールでのゲームを経験させることで、今までの学習を活かせるか、このままでクラスの皆が楽しむことができるかについて考え、アップデートの必要性が生まれるきっかけとなった。

(4) 誰もが大切にされる存在

対象生徒だけでなく、この授業に参加している全ての人々が、大切にされる存在であることを大前提のルールとして確認した。試合を行うときや大会を企画運営するときに、声が大きな（主張が強い）一人の意見や、対象生徒に配慮しすぎた意見にならないように、多くの人の声に耳を傾けながら、限られた時間の中で、合意形成をしていく経験を積むようにした。

6. 障害のある生徒について

(1) 障害の種類…肢体不自由（対象生徒Aさんとする）

対象生徒Aさんは、車いすで学校生活を送っている。また、頭部に器具を埋め込んでおり、頭部へのボールの衝突を避けなければならない。そのため、学校生活を支援する支援員を1名配置し、体育授業においても、車いすを押したり一緒に活動したりするなどの支援を行っている。Aさんは、安全面を第一に考え、小学校時代の体育授業のほとんどを見学で過ごした。中学校に入学後は、授業内容によって、また、Aさんをサポートする教員が介助しながらの活動は参加することができた。例えば、バレーボールの試合では、サーブをコート内から投げ入れ、その後は、支援員が車いすを引いてコート外に出ていた。このように、Aさんの可能な方法で体育授業に参加してきた経緯がある。今回のバドミントンでは、支援員がAさんに向かってシャトルを下から投げ、それを打ち返すこととした。

(2) 具体的な手立てや支援

本人の思い（何がしたいのか、何ができるようになりたいのか）を聞き取り、自己実現の経験を積み重ねることができるようにした。一方で、対象生徒の意見だけをすべて通すことを目指すのではなく、全体の中で対象生徒も大切にされるべき存在の一人であることを他の生徒も理解し、それを実行できるようにした。そのため、単元前後に「誰もが楽しめるバドミントンとは」という問いを生徒へ問うことにした。また、対象生徒の運動有能感（特に統制感や受容感）を高める手立てを進めた。まずは、「統制感（できそう）」を高めるための、用具の工夫（柄の長短、ガット面の広さ、シャトルの色、シャトルの形状）や、ルールを適宜アップデートさせることなどにより、活動に前向きに粘り強く取り組むことをさせていき、その結果として、技能習得を目指した。そして、「受容感（受け入れられる）」を高めるために、グループ内で意見を表現する機会を設けたり、Aさんへの聞き取りを行ったり、全体場でAさんの思いを投げかけるなどして、全体の一員である認識をもつことや仲間との関わりが生まれる場面を設定した。

7. 倫理的配慮

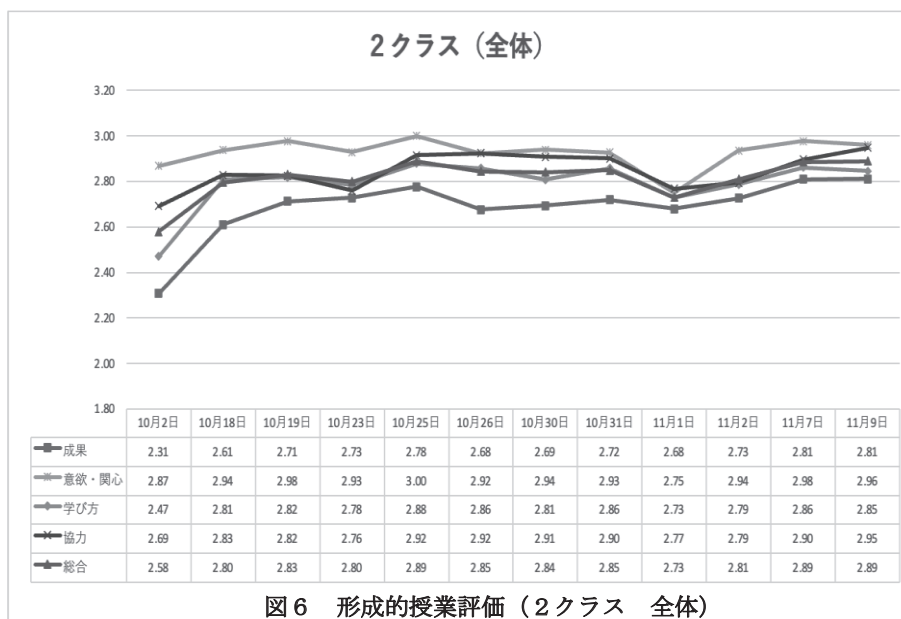
本研究の実施にあたり、対象校の学校長及び授業者、協力教員に対し、研究計画や調査内容に関する説明を行い、同意を得た。また、対象生徒AさんおよびAさんの保護者の方にも教員を通じて書面にて説明をし、同様の同意を得た。

Ⅲ. 成果

1. 全体の形成的授業評価

図6は、形成的授業評価の推移であるが、評価の対象は、実技（体育館での体育理論含む）に限定されるため全12回となった。まず、成果の平均値は、10月2日の2.31から最終11月9日の2.81へと推移し、全体として増加がみられた。意欲・関心は、初回から比較的高い水準にあり、10月25日には、最高値の3.00を記録。その後も2.90以上をおおよそ維持し、最後の11月9日時点では、2.96となった。学び方の平均値は、10月2日の2.47から最終的には2.85に上昇し、安定した向上がみられた。協力の評価は、全体的に高く推移し、最後の11月9日には、2.95の最高値を記録した。総合評価も上昇傾向を示し、初回の2.58から最後の11月9日には、2.89に至った。

本研究の結果から、意欲・関心は、初回から高かったものの成果や協力の次元を落とさなかったことで、そのまま維持をみせた。他の項目も初回目より最終日の方が、全体的に数値が高い。これは、生徒が自らの成長を実感することで学習意欲が高まり、さらに成果へと繋がるという好循環が生まれている可能性を示している。しかしながら、11月1日のデータの急降下も見逃してならない。この時間は、体育館内で行う体育理論（ルールづくり）の時間であった。本来なら直接的な実技授業ではないため、形成的授業評価を取る必要はないが、このデータは興味深い。この時間の授業の大きなねらいは、「大会を企画しよう」であり内容は、「みんなが楽しめるバドミントン大会を班で考える」ことであった。つまり「みんなが楽しめるバドミントンルールをつくる」時間であった。1時間目に体育理論を入れたとは言え（パラスポーツ、アダブテッドスポーツなどのルールについて学ぶ）、どのようにルールを作成したら良いか戸惑いがあったのは事実であろう。因みに、意欲・関心のスコアは、初回から2.87と高く、生徒が体育に対して元々前向きな態度を持っていたことがうかがえる。特に10月25日には、3.00を記録しており、技術練習だけからオフザボールの動きの学習に移り、関心が高まった可能性がある。「学び方」と「協力」は、ほぼ同時期に上昇しており、グループ活動やペアワークの実施によって学習態度の改善と協働性が同時に促進されたことが考えられる。



2. 対象生徒 A さんの形成的授業評価

続いて、対象生徒の A さんの成果スコアを示す（図7）。最初の授業を欠席し、10月18日の授業も見学参加となりその授業は、1.67と低い水準を示した。しかし、11月1日に3.00を記録するなど、最終的には、0.66の上昇がみられた。意欲・関心については、2回目以降高い値を維持しており、ほぼ全期間で3.00を記録。学び方の評価も、A さんにとっての初回実技はやや低めであったが、それ以降の日には、最終日を除き安定した。協力のスコアは、初回実技には1.00と最低評価で始まったが、その後急激に改善し、10月31日に3.00を記録。11月

2日は、2.00と低下したものの、全体としての向上傾向が顕著である。総合評価は、1.67から始まり（Aさんにとって初回実技）、11月1日には、3.00とピークを記録。最終日は、2.46であった。

まず、成果に関しては、生徒Aさんにとって、技能的に難しかったのではないかと推測できる。特に10月25日は、「ポジショニング練習」の日であり車いすのAさんにとって動くことの難易度が高い。そういったことが起因している可能性がある。それでも、実技面では、繰り返し練習を重ねることで、2回に1回程度は、相手コートにサーブを打つ様子がみられた。また、ラリーが続く中で相手が打ったシャトルを打ち返すことができるようになったことを付記しておく。意欲・関心の項目では、ほぼ最高評価の3.00であり、高い内発的動機づけを持って授業に参加していたと推測される。今まで体育授業に参加の経験がほとんどなかったが、今回は、「誰もが楽しめるバドミントン」を共に考える授業であったため承認も含めこのようになった可能性がある。Aさんにとってこの授業の大切さがわかる。意欲・関心の安定は、他の項目（特に成果や学び方）に良い影響を与えた可能性が高い。協力に対する評価は、最初1.00と非常に低かったが、これは、見学だったことが関係していると思われる。実質的に参加をしていけば、3.00まで上昇し、グループ活動や教師からのフィードバックが効果的に機能したと考えられる。

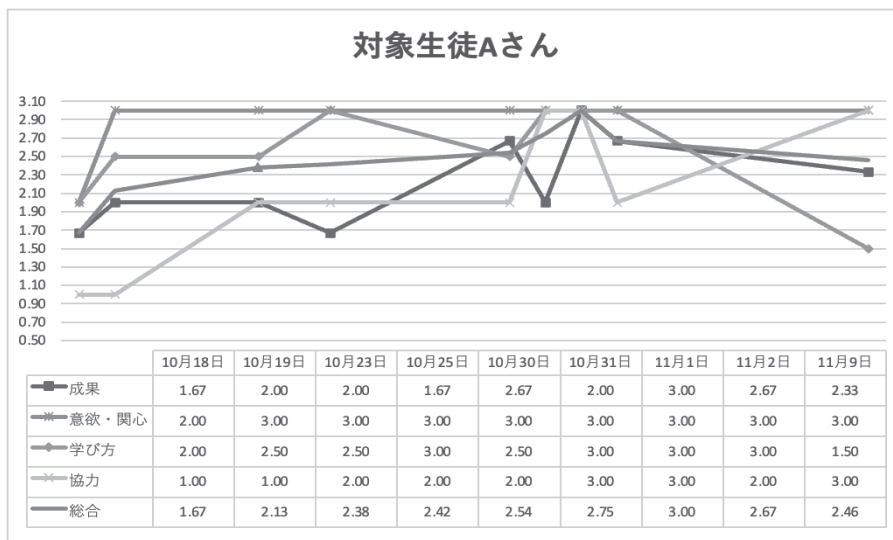


図7 形成的授業評価（対象生徒Aさん）

3. 学習カード分析

ここでは、対象生徒Aさんの学習カードを確認してみたい（図8）。内容は、単元前後に聞いた、「誰もが楽しめるバドミントンとはどのようなものだろうか？」の比較に限定する。まず、対象生徒Aさんの単元前の回答は、「年齢関係なく楽しめる/遊びでもスポーツとしても楽しめる」という回答であった。それが、単元後には、「私みたいな障害を持った人でもできるようにルールを変えたり少しやり方を変えると誰でも楽しめるのではないかと考えた」に変化した。単元前は、仮説のような（憶測で）、今自分が考えていることを記述しているが、単元後には、経験によって感じたことを表現できているため、Aさんにとっても重みが異なるであろう。

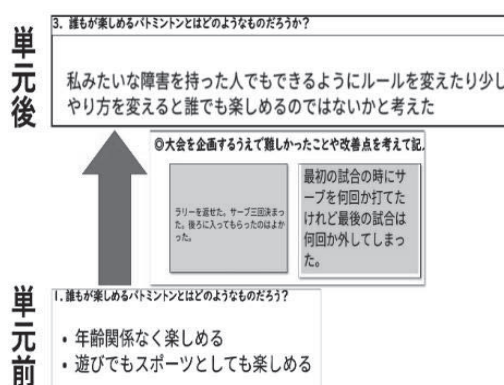


図8 学習カード（対象生徒Aさん）

授業者らは、このAさん自身が学習内容になったり（なりすぎたり）、教材になったり（なりすぎたり）することを懸念していたが、その懸念は、払しょくされた。今までAさんは、他者から受け入れられたり、自分のことを考えてルールを考えたり、そのルールづくりに参加したりの経験が乏しかったため、今回の授業では、工夫

さえすれば（してくれれば）、自分も楽しく参加できるかもしれないと考えたのであろう。その背景には、以下のインタビュー内容が関わっていると思われるため、以下に添付をする（図9）。

<p>①本授業ではAさんにとって「障壁、障害（困った事）」となるものはあったか。「ある」のであればそれは何であったか。「ない」のであればそれはなぜそのような思ったのか。 なかったです ゲームのときに普通だったら2人ずつやるけどもう一人の子がいてくれて、自分のところに来てそのとれへんかったときにその後ろの子がとってくれたりとかしてくれたからちょっと安心したな</p> <p>②「できる」ようになったことはありますか。「ある」場合それはなぜ「できる」ようになったのか。 あります 最初小さいラケットを使っただけ、大きいラケットに変えてからちっちゃいラケットより打ちやすかったから、相手コートへ打てる回数が多くなった</p> <p>③「わかる」ようになったことはありますか。「ある」場合それはなぜ「わかる」ようになったのか。 あります 最初の始めたての時は、ゲームのときになかなかネットからシャトルが超えなかった先生にどうやったら入るかっていうのを教えてもらったから、どんどん入るようになった</p> <p>④「（人と）かかわれる」ようになったことはありますか。「ある」場合それはなぜ「（人と）かかわれる」ようになったのか。 ありました 最初の班で色々で交流するときに、全然自分の意見が言えなかったけど最後の方になってから自分の意見言えるようになったし、班の人とかかかわれました ※最初に比べて言えるようになったのはなぜ？ 先生にどうやって班の人に言ったらいいか教えてもらって言えるようになりました</p> <p>⑤今までの授業と今回の授業は違った（やりやすかった）か教えてください。その理由も教えてください。 他の競技と比べて、班の人に 私がこういうやり方だとやりにくいとかっていうのを伝えたら理解してくれて反応してもらえて、その違うルールのゲームをしてくれたこと</p> <p>⑥本実践を通してまたやりたいと思えたか教えてください。その理由も教えてください。 私はちっちゃい時に車いすだからできない競技が多いと思って、できる限りのことしかやってなかったけど、今回の体育の授業で自分にもできることがいっぱいあるやなって感じました</p>

図9 本実践に対してのインタビュー

4. ルール学習論

ここでは、本実践を丸山真司のルール学習分類論（1997、2015、2019、2025）から分析してみたい。なぜなら、

本実践は、「誰もが楽しめるバドミントン」を「つくる」ことに焦点をあて、「ルールを考える」ことに重きをおいていたためである。丸山（2025）は、体育の中で展開されてきたルール学習を図10のように6つのタイプに分類した。その中で、従来の体育授業では、①②③のルール学習が多いと分析している。丸山は、その背景を学習指導要領の影響だと考え、きまりや規則を守る

- | |
|--|
| <p>①社会的態度を育成をねらい</p> <p>②既成のスポーツ・ルールを覚える学習</p> <p>③教師が設定したルールの変更（発育、技能等に合わせる）の中で学ぶ</p> <p>④ルールづくり学習</p> <p>⑤ルールの歴史を学ぶ（変遷史）学習</p> <p>⑥ルールの役割・原則・意味などを学ぶ学習</p> |
|--|

図10 丸山真司のルール学習分類論（1997、2015、2019、2025）

ることの学習はなされてきたが、ルールに関する知識面の学習が疎かであったと指摘している。また、この手のルール学習は、「スポーツのルールは守るもの」であり「スポーツのルールを守るという態度が社会一般のルールや法を守る態度の形成に役立つとする極めて楽観的な考え方」と危惧している。「法だから従う」だとか「ルールだから従う」といった形式的、実質的危うさを指摘しながら、ルールがその趣旨や存在理由を問われる必要があるという。子どもたちに、「暗黙裡にルールは守るもの、疑ってはならぬものといった観（ルールの絶対化・神聖化）を身につけるような体育授業が行われてきた」が、本来のルール学習の核心は、「ルールの持つ役割や原則、意味（や歴史に関する内容）などを学習の対象にする学び」だと示唆している。丸山の指摘は、図10の⑤⑥にあたる。次に④ルールづくり学習についての重要性も指摘している。ルールづくりは、体育授業でよく行

われているとしつつも、それは、本来の意味ではないことが多く、ルールを修正したり、創ったりすることは、子どもの実態に応じてみんなが楽しめるようにスポーツに手を加えるだけに留まらないう指摘している。その意図として「スポーツのルールを神格化・権威主義化せず、ルール、する人間によって、『コンセンサス（合意）』でもって変えられるものであり、変えるためにはルールについての『なぜ』＝ルールの意味や原則、ルールづくりの目的・内容・手続きについての知識が必要」だとしている。

さて、ここからは、本実践をこのルール論に基づいて分析してみたい。本実践は、図 10 でいうと①②④にあたるのではないだろうか。まず、①に関してであるが、「誰もが楽しめるバドミントン」を考えること、すなわちインクルーシブ体育実践を行うことは、結果として、「社会的な態度を育成」に寄与する可能性が高い。また、バドミントンという素材を②で行いながら、④に向かっていった実践であった。しかしながら、問題もあった。先の丸山の指摘の通り⑥を学ぶことが疎かになっていた。根本的な「ルールの役割・原則・意味などを学ぶ」ことが欠落していたため、④が難しかった可能性が高い（ルールづくり学習も乏しかったため）。形成的授業評価（全体）においても、大会の企画時の評価が低い原因は、このようなことも関係しているかもしれない。そもそも「いつ、だれが、なんのために、どのような手続きで」ルールを修正したり、創ったりすれば良いのかを学ばなければ、生徒たちにとって④に辿り着くことは難関である。それでは、今回インクルーシブ体育におけるルール学習では、どのような順序、系統で学ばれば良かったであろうか。筆者は、⑥→②→⑤→④→①、③（①は、「ルールを通して社会性を身につける」ため、③は、「教師主導のルール学習のため」少し別の次元となる）という順序が相応しいのではないかと考察する。繰り返しになるが、丸山の指摘からも本実践からも、最初に⑥ルールの役割・原則・意味などを学ぶことが不可欠であると考えられる。その次に、②と⑤はどちらを先に学んでも問題ないと思われるが、先に馴染みのある②既成のスポーツ・ルールを覚える学習をし、その後、その既成のスポーツの過去を⑤ルールの歴史を学ぶ（変遷史）学習を通して、ルールの変容過程やどのようにルール修正がはかられてきたかを学ぶ。その後ようやく④でルールを修正したり創ったりが可能になると考えられる。⑥②⑤という知識を通して④を実行（知識及び技能）していくことになる。本実践では、その知識習得の前に実行（技能）に移してしまい苦戦した可能性が否めない。

それでは、本実践のような生徒自身たちで、「誰でも楽しめるスポーツをつくる」ための方法論の可能性を探りたい。まず、図 11 のような、岩田（1994）の教材づくりの視点を援用する。先に示した⑥②⑤+④の知識を生かしながら素材を（今回で言えばバドミントン）再構成する。再構成の視点は、「内容的視点」と「方法的視点」を生かしながら決定していく。その決定には、「みんな」のコンセンサス（合意形成）が必要不可欠である。ただし、その合意形成に関しても「合意」の仕方を学ばなければ、声の大きい人や今回で言えば障害をもった生徒の意見をそのまま聞くことになってしまう懸念がある。ここは、体育が引き取るのか社会科の授業などと横断的に

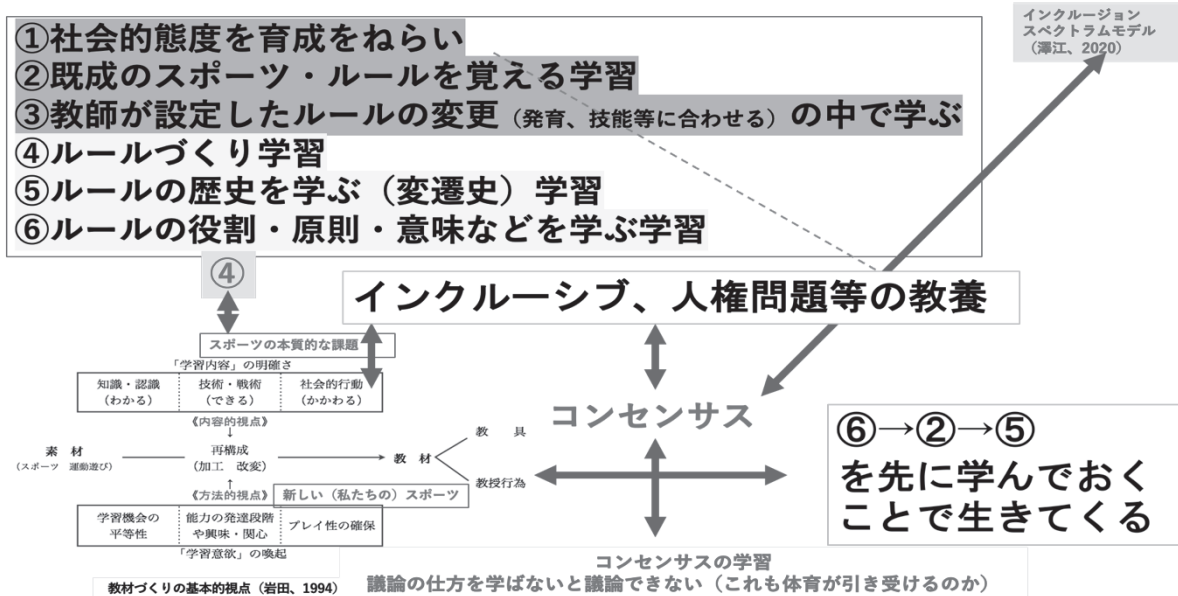


図 11 誰もが楽しめるスポーツをつくる概念

学ぶことが良いのかは検討の余地が残る。もちろん今回は、スポーツをつくるうえでインクルーシブや人権に関する知識も必要であろう。また、「みんなで楽しむ(学ぶ)場面」と「個人の成長(学ぶ)場面」は、分けなければならないがあり、必ずしも「すべて一緒に」ではないはずである。そして、その考え方は、インクルージョンスペクトラムモデル(澤江、2020)に学ぶことができる。さらに、インクルーシブ体育における「人権(誰一人排除しない)」と「教育効果(一緒に学ぶとこのような教育効果がある)」は、分けて考えなくてはならない時と一緒に考えなくてはならない時とをしっかりと検討すべきである。ここまで、ルール学習について本実践を分析してきたが、この内容を学ぶべき場所は、体育実技だけではなく、体育理論も重要となる。しかし、体育理論の授業に、この時間が割けられるほど時間を確保されてはいない。今後のカリキュラムの見直しが待たれることとなる。

IV. まとめ

インクルーシブ体育は、障害を持った生徒(児童)といわゆる健常生徒(児童)と一緒に体育授業を行うだけのことを指すわけではない。そういった意味では、体育科は、かねてから例えば異質協同の学びといった形でインクルーシブの視点を持ち授業実践を行ってきたはずである。しかしながら、ある特定の生徒(児童)を意図的にまた無意図的に「排除」をし「不在」とさせてきた現実もまた事実である。そもそもインクルーシブ体育とは何なのか、どのように行えば良いのか。そんな悩みを実践者、協力者らと共に抱きながら出発した実践であった。

本研究は、そのインクルーシブ体育実践から成果と課題を読み取ることを目的とした。特に体育理論と体育実技の連携からルール学習に着目し、その目的に迫った。以下にその成果と課題を示す。

まず成果は、形成的授業評価(全体)の結果から生徒たちに概ね本授業が受け入れられたことである。あまり馴染みがない、インクルーシブ体育、体育理論、ルール学習などを、長い単元を確保し、スモールステップ的に(知と技を関連づけて)学習できたことが、その要因のひとつといえる。対象生徒Aさんについても学習カードやインタビューの回答から、自分が参加をし、運営をしたり、大会に出たりしたことで、「自分にもできることがいっぱいある」と感じたことは、大きな成果と言える。

しかしながら、課題もいくつかある。まず、本実践を通してインクルーシブ体育を行う際には、体育理論が不可欠であると思われるが、授業時数の少なさからカリキュラムの再検討が必要だということ。さらに教師には体育理論と体育実技を連携して学習させる能力が求められるなど、実践には多大な知識、計画、実践力が求められる。また、インクルーシブ体育を実践するには、生徒自身にもインクルーシブ「の」教育が必要であり、それは、体育だけでは補えず、教科横断的な学びが必要である。そして、インクルーシブの視点、つくるスポーツ、ルール学習の視点が教師、生徒共に求められる。このように質の高い授業を行うためには、生徒教師共に時間と労力を割かれるため、それに寄与できる研究が今後も求められる。

V. 主要参考文献

- 中央教育審議会(2012)共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告). 文部科学省 HP. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm
- 文部科学省(2015)インクルーシブ教育システム構築事業. 初等中等教育局 特別支援教育課.
- 岩田靖(1994)教材づくりの意義と方法, 高橋健夫編, 体育の授業を創る. 大修館書店, pp. 26-34.
- 丸山真司(1997)体育におけるルール学習の問題点と今日的課題, 体育科教育 45(12)大修館書店, pp. 40-43.
- 丸山真司(2015)体育のカリキュラム開発方法論. 創文企画
- 丸山真司(2019)「スポーツ文化の主人公」を育てるルール学習, 体育科教育 67(1)大修館書店, pp. 12-16.
- 丸山真司(2025)体育におけるルール学習とは何か, たのしい体育・スポーツ, 44(3)創文企画, pp. 16-21.
- 澤江幸則(2020)インクルーシブ体育の可能性と限界. 体育科教育学研究, 36(2), 33-38.
- 高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎(1994)体育授業の「形成的評価法」作成の試み. 体育学研究: 39, pp. 29-47.